

倫理、政治・経済

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

平成26年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の公民科受験者数（追・再試験を含む。）は205,461人で、昨年度比15,204人（6.9%）の減少となった。減少の人数は昨年度よりも小さく減少の割合は毎年小さくなりつつあることから、一昨年度の試験制度の変更が次第に定着してきているものと考えられる。

受験者数は各科目とも減少しており、その内訳は「現代社会」が昨年度比5,611人（6.7%）、「倫理」は2,389人（6.6%）、「政治・経済」は3,518人（6.9%）、「倫理、政治・経済」（以下「倫政」という。）は4,516人（8.5%）であった。その要因としては、センター試験の受験者数自体が減少していることなどが考えられる。

「倫理、政治・経済」の追・再試験は昨年度と同様、大問6問で構成され、「倫理」分野、「政治・経済」分野から、それぞれ大問が3問ずつ出題された。設問は「倫理」分野から19問、「政治・経済」分野から20問で、50点ずつの配点も変わっていない。

「倫理」分野の大問3問のリード文は、青年期・現代の倫理的課題、日本の思想、西洋近現代の思想の「倫理」のものがそのまま使われ、それに付属する各設問は、1問を除いて「倫理」との共通問題が抜粋されて出題された。設問は、基本的な人名や概念に関する知識・理解を問うものから、基礎知識をもとに資料文を丁寧に読むことで正解に至ることができるような思考力・応用力を問うものまで出題されたのは昨年と同じであった。また、出題の分野と時代に関してバランスをとるため源流思想と西洋近現代の両方の内容を含む「倫政」単独の設問が1問出題されたことも昨年と共通していた。「倫理」分野全体としてやや難しい難易度の問題であった。

「政治・経済」分野は、すべての設問が「政治・経済」との共通問題として出題され、本試験と同様に、「倫理、政治・経済」単独の設問はなかった。第4問のリード文は「倫理、政治・経済」オリジナルのものであるが、小問は「政治・経済」本試験の第1、2、5問からの抽出であり、第5問、第6問は「政治・経済」本試験の第3問、第4問をそのまま引用している。リード文は、受験者が国内外の政治的・経済的な状況と諸課題を把握し、今後受験者たちが生きていく社会の在り方を考える契機となるものであった。大問のテーマ・内容としては、政治と経済に関する融合問題、経済原則と日本の社会的な諸課題、日本国憲法における権利や義務が取り上げられた。

出題内容は、基礎的・基本的な知識や理解を問う問題が中心となっていたが、既習の知識を活用して資料やグラフを読み解くような思考力や判断力を求める問題もあった。出題からは受験者に対して、現代の政治、経済、国際関係の動向や本質を探究させ、民主的、平和的な国家・社会の優位な形成者として必要な公民としての資質を養う、とした高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）に沿った出題者の意図を感じることができる。

以上のことを踏まえ、細部にわたる評価にあたっては、次の点に留意して行った。

(1) 学習指導要領の目標・内容に適合しているか。また、それに準拠した教科書や授業内容に則し

た問題であるか。

- (2) 基礎的・基本的なものから広い視野に立った思考力・判断力・応用力を問う総合問題まで、バランスよく配分されているか。
- (3) 「倫理」分野については、リード文は、メッセージ性を持ったもので、「倫理」を学んだ受験者を啓発するものであるか。
- (4) 「政治・経済」分野では、科目の性格に鑑み、身近な社会問題についての関心と考察を促すように工夫されているか。
- (5) 各分野の問題配分は適切か。問題の出題方法、配点、難易度は適切か。
- (6) 過去の問題に対する意見や評価を生かしているか。

2 試験問題の内容・範囲等について

試験問題の内容等については、学習指導要領で学ばせることとしている「倫理」、「政治・経済」の各分野からバランスよく出題されていると考えられる。なお、第1問から第3問までが「倫理」分野、第4問から第6問までが「政治・経済」分野からの出題であった。以下、大問及び設問ごとの出題内容及び難易の程度等について記していく。

第1問 「デザイナーベビー」について（青年期の課題、現代の諸課題と倫理）

遺伝子操作、クローン、臓器移植、出生前診断等の生命科学や生殖技術の著しい進歩にともない、私たちが受け入れてきたこれまでの生命観だけでは対処できない様々な問題が生じてきている。それにともない、生命の価値や生と死の問題等について考えることが重要となってきた。受験者とはほぼ同世代の青年とその親が、デザイナーベビーを題材とした映画の話題をきっかけに、次第に「幸せな人生」について会話を深めていくリード文からはメッセージ性が感じ取れる。日本人をはじめ多くの研究者が生命科学の常識を覆す画期的な成果を上げている現在、このリード文から現代の倫理的な諸課題について考えさせようとする意義は極めて大きい。青年期の課題と現代の倫理的課題とが融合された大問となっており、全体的に無理なくまとめられているが、難しい難易度の問題である。

問1 経済活動が生態系に及ぼす影響に関する基本的な用語についての知識を問う平易な問題であるが、今日的な話題からみるとやや古くなってきた感もある。標準的な難易度の設問である。

問2 日本における生殖技術をめぐる状況についての正誤問題である。ア、イの文末が「懸念されている」、「問われている」という記述になっているとおり、それぞれの内容は今日的な課題である。3つの記述についてすべて正誤を求められる問題の一つである。正答は導き出せるが、やや難しい設問である。

問3 人間の幸福や不幸について思索した、分野を超えた人々についての出題であり、幅広い知識と理解が必要となる。シモーヌ・ヴェイユと有島武郎を学習する機会は少なく、難しい難易度の設問である。

問4 エリクソンの半生をたどる文章をもとに、興味深く工夫された出題となっている。ウとエの記述が紛らわしくなっているが、彼の唱える人生周期（ライフサイクル）の考え方をきちんと理解していれば正解できる。難しい難易度の設問である。

問5 近代社会における人間の主体性について考察したフーコーの文章からの出題である。

フーコーの権力論についての知識がなくとも、この「パノプティコン」の例を読むことにより受験者の理解が深まる良問である。やや難しい難易度の設問である。

第2問 「他者とのどのように共同して生きるのか」について（日本の思想、源流思想）

この大問のリード文は、古代以来の日本の共同の在り方の変遷をたどりながら、受験者たちに対して他者との共同の在り方を模索することを呼びかけている。文中では富国強兵を目指す急速な近代化の流れの中で、日本が国家重視の傾向を強めた後、敗戦後になって個人が尊重される新しい社会の在り方が求められたことが示されている。しかし、現代の高校生にとって、他者との共同の在り方の現実はどのようなものでありうるのだろうか。おそらく、彼らは集団の空気を読むことを意識せざるを得ない状況の中であって、単純に自己中心的な個人主義の中を生活しているわけではあるまい。そのような受験者たちの現実からすると、日本思想を参考に、他者との共同のあり方を模索することの重要性を提案するこの大問のリード文は、少なからず凡庸な印象をぬぐうことができない。結果として、この大問は全体としてはやや難しい出題となった。

問1 ブッダの「四法印」についてのしっかりとした理解を問う設問である。それぞれの選択肢には、仏教の基本的概念がキーワードとして使用されており、簡単に不適当と判断できるものはない。難しい難易度の設問であると考えられる。

問2 栄西の思想の説明を、親鸞、道元、日蓮の説明の中から選ぶ設問である。栄西の著作『興禅護国論』の名前を知っていれば、「座禅に打ち込み、悟りに達することによって、自己だけでなく国家をも平安にできる」という説明が栄西の思想について述べたものであることが分かる。標準的な難易度の設問である。

問3 藤原惺窩の略伝についての知識を問う設問である。西川如見、室鳩巢、木下順庵の人名の中から選択するが、それぞれの人名を知っている受験者にとっては平易な設問であった。

問4 諸子百家の思想について、基礎・基本的知識を問う設問である。「人為的」、「法」などのキーワードが文中に示されており、きちんと理解していれば正解に到達するのは困難ではない。標準的な難易度の設問である。

問5 平田篤胤の思想についての理解を問う設問である。選択肢は契沖、本居宣長、賀茂真淵の思想の説明なので、平田篤胤の思想についての理解が十分でなくとも、国学の他の思想家についての理解が定着していれば正解を導くことができる。平田篤胤の説明自体は、復古神道の説明に加えて、教科書ではあまり扱われない幽冥界に関する説明があったため、やや難しい設問となった。

問6 社会的弱者の問題について考えた人物、北一輝、与謝野晶子、河上肇の思想についての説明の正誤を問う設問である。近年出題量が増えている正誤組合せ問題は、いずれも受験者を悩ます難問になりがちであるが、この問題は特に難しい設問となった。設問の内容としては、与謝野晶子の説明に平塚らいてうの説明が混在していることは選択肢の判別をわかりやすくしているが、北一輝と河上肇の思想については、倫理の授業の中でも取り扱うことが少ないため、受験者を悩ませる問題であったと思われる。しかし、戦前の日本の思想を考える上で、社会的弱者についての問題は避けることのできないテーマであることを示唆する設問

である。

問7 リード文を読み、その趣旨に合致する5行の記述を選択する標準的な難易度の設問である。選択肢の文が示す内容は正誤が明白だが、文章が長いために問題を解くために時間を必要とする分、受験者にとっては負担となったと思われる。

第3問 「異文化・他者との共存」について（西洋近現代思想、源流思想）

異文化との接触から寛容の精神、さらに西洋的価値の相対化と話題に広がりを持たせながら、主要な思想家をうまく配置したリード文である。ソシュールやレヴィナスの深い理解を問う設問など新課程入試に向けての意欲も感じられる。思想内容の理解を問うという方向で丁寧につくられ、生徒の学習の成果を測ることができる設問が多い。また、異文化理解の場面において、単に互いを尊重しあうというだけではなく、真剣に向き合うことの必要性を説くメッセージのこもったリード文である。やや難しい設問も見られるが、全体としては標準的な難易度の問題である。

問1 「倫理、政治・経済」の独自問題である。空欄のあとの説明が人間尺度説の内容であること、また「相対主義」という言葉から、ソフィストのプロタゴラスが選ぶことができる。パルメニデスはやや細かい内容であるが、積極的にプロタゴラスを選ぶことができるだろう。また、トマス・アクィナスの著書『神学大全』もやや細かい知識といえるが、アウグスティヌスの『神の国』、ヘシオドスの『神統記』とともに知っておくべき事項である。難易度としては平易な設問である。

問2 モンテーニュの著作とその思想内容を問う設問である。他の選択肢が、ヘーゲル、モンテスキュー、ピコなどと想定できる平易な難易度の設問である。

問3 ミルの質的功利主義、さらに精神的快樂の重視の理解が問われた。誤りの選択肢がミルからはややかけ離れており、平易な難易度の設問である。

問4 知ることと社会的実践の関連性について述べた先哲の思想を問う設問である。様々なジャンルから出題されているが、ムスリム、王陽明、ガンディー、プラトンそれぞれの思想について、キーワードを理解していれば解答が可能である。標準的な難易度の設問である。

問5 デカルト、ヒューム、カントの認識論を正誤の組合せで答えさせる設問である。教科書的な知識内容を確認したうえで、「そして」「そしてそこから」「それゆえ」と繋いで、帰結を考えさせる点でオリジナリティを感じる設問である。カントの帰結が実はバークリーの内容であることに気づかなければならず、やや難しい難易度の設問である。

問6 既存の枠組みの相対化という視点から、ジェームズ、クーン、ソシュールの3人の思想を問う組合せ問題である。教科書などの記述の少ないソシュールであるが、3人の内2人の思想家が分かれば正解できる標準的な難易度の設問である。

問7 リード文の趣旨に一致する記述を選ぶ設問である。それぞれの選択肢が、時間的な経緯に従って考え方の変化をたどる記述になっているが、それぞれの結論部分が決め手となっていることを読み取れば、誤りの選択肢ははっきりとわかる。平易な難易度の設問である。

第4問 「政治と経済に関する融合問題」

リード文は、グローバル化が進む現代社会において、人々の意思がどのように表明され、社会のしくみの中にどう反映されるべきかということについて考えさせる文章である。各設問

は、基本的な知識があれば正答を導き出すことができる標準的な問題が多いが、資料を分析し、思考力・判断力を問う問題も出題されており、バランスの取れた出題構成である。

問1 民主的な政治体制について問う問題である。①の「各国」とは何を指すのかわかりにくい。難易度は標準的である。

問2 財産権の保障について、誤っている選択肢を選ぶ問題である。近年の動向を反映した選択肢もある。基本的な知識を問う、標準的な問題である。

問3 過去40年間における日本、韓国、スウェーデン、中国の一人当たりのGDP（国内総生産）とCO₂（二酸化炭素）排出量との関係をグラフから読み取る問題である。③④は、「一人当たりGDPの増加に対する一人当たりCO₂排出量の増加割合」について折れ線グラフの傾きの意味に気付くと、正答を導くことができる。資料を分析し、思考する力を問う良問である。難易度はやや難しい。

問4 外国為替制度について問う問題である。日本の円と他国の通貨との関係を問う問題ではないこともあり、受験者には少々なじみにくい問題であった。しかし、概念を正しく理解しているかどうか、さらに思考力や判断力を問う良問であると考えられる。難易度は標準的である。

問5 関税制度について、仮想の3国間での交易条件を図式化したものから思考する問題である。基本的な内容を問う問題だが、形式を変えて出題されていることもあり、難しく感じた受験者もいたことであろう。総合的な学力を試される、標準的な問題である。

問6 冷戦終結後の武力衝突について問う問題である。基本的な知識を問う、標準的な問題である。

第5問 「経済原則と日本の社会的な諸課題」について

日本が抱える社会的な問題をテーマにして、先生と学生との会話で構成されたリード文である。政治分野と経済分野を融合させた問題構成である。標準的な設問から易しい設問が多く、難易度はやや易しめである。既定の役割や視点を見直すことで社会における諸問題を解決することを受験者には目指してほしいというメッセージ性の高いリード文である。

問1 資本主義経済の発展に関する四つの文章を古い順に並べる問題である。ヨーロッパにおける資本主義経済の発展の流れに加えて、第二次世界大戦後の日本経済の発展の流れを考えると正答が導ける標準的な問題である。

問2 近年における日本の労働環境の現状や課題について、誤っている選択肢を選ぶ問題である。受験者に時事的・社会的な事象に対する関心を高めてほしいという意図を感じる問題である。やや易しい問題である。

問3 経済学者とその学説の組合せを問う問題である。非常に易しい問題である。

問4 日本の社会保障制度について問う問題である。それぞれの制度の具体的な内容を問うており、少子高齢社会を支えていく受験者には社会保障制度への関心をさらに高めてほしいと思う。難易度は標準的である。

問5 日本の地方の行財政について問う問題である。基本的な知識を問う、やや易しい問題である。

問6 公債残高の推移について、グラフから読み取る問題である。残高の増減などについて、

政治的もしくは経済的なできごとに触れながら考えていく問題である。難易度は標準的である。

問7 企業におけるコンプライアンス（法令遵守）について問う問題である。基礎的な知識を問う、易しい問題である。

第6問 「日本国憲法における権利や義務」について

「未成年者」をテーマに、日本国憲法が保障する人権、違憲立法審査権、地方自治制度や憲法改正について問う問題である。難易度については、難しい設問と易しい設問がバランス良く出題されていると考える。リード文では、「未成年者」も「社会の一員として政治・経済の問題について常に関心を払い、自分の意見を持っておく必要がある」と記述するなど受験者に対するメッセージ性の強いものとなっている。一方、リード文と各設問との関連性が薄く、リード文を要約する設問を出題するなどリード文を生かす工夫をすることで、さらに質の高い問題になることを望む。

問1 最高裁判所が判断した違憲判決について問う問題である。基本的な知識を問う、やや易しい問題である。

問2 私人間における人権の制限について問う問題である。基本的な知識を問う、標準的な問題である。

問3 復興財源確保法について問う問題である。同法が国税を対象とするという判断が時事的要素を含み、難しく思った受験者もいたと思う。国税と地方税を判別し、さらに消費税は2014年4月から税率が上がることから、正答を導くことはできる。しかし、設問の趣旨が明確となるようなさらなる工夫を望む。難易度はやや難しい。

問4 刑事手続について問う問題である。消去法で考えた受験者も少なくないと思われるため、基本的な知識を問う問題であるが、やや難しい問題である。

問5 憲法改正について問う問題である。やや易しい問題である。

問6 都道府県議会について、誤っている選択肢を選ぶ問題である。④は他の選択肢と比較すると難易度が高めであり、受験者にとって難しい問題である。

問7 地方自治制度について問う問題である。基礎的な知識で解くことができ、標準的な問題である。

3 試験問題の分量・程度等について

「倫理」分野では、本試験の大問4問の中から、第2問を除く3問のリード文を使用し、そこへ関連のある設問を結びつけた形式で出題された。設問は、基礎的な人名や用語、基本的な概念に関する理解、さらには基礎的な知識をもとに思考力・応答力についても出題され、各分野のバランスがとれていた。さらに、第3問の問1において自他の違いに関する議論を読み、語句の組合せを問う設問があるが、これは「倫政」単独の設問である。「倫理」分野全体としては、やや難しい難易度の問題と考えられる。

「政治・経済」分野については、以下、3点に分けて述べる。

(1) 問題の分量・程度は、資料のとおり四つの観点から分類した結果、おおむね適切であったと考えられる。教科書に基づく知識を問う問題は、昨年度の15問36点から13問33点に、教科書に基

づく知識を使って思考力や応用力を問う問題は、昨年度の4問11点から3問8点にそれぞれ減少した。一方、時事的な問題については昨年度は出題されなかったが、今年度は2問4点出題された。資料を用いて分析力等を問う問題も、昨年度の1問3点から2問5点に増加した。昨年度指摘した時事問題の設定については、今年度大きく改善が見られた。また資料を活用する問題が増えたことは、「政治・経済」への関心を高め思考力や判断力を深める観点からも歓迎すべきものである。「政治・経済」という科目の特性に鑑み、このような設問の方向性は望ましいものであると考える。今後も一層の充実を期待したい。

- (2) 各分野の問題配分及び配点については、政治分野が12問30点、経済分野が8問20点となり、本試験同様政治分野中心の構成となっている。また、基礎と応用というレベルでの分類では、基礎が17問44点、応用が3問6点となっており、基礎的で平易な問題が多く出題されている。
- (3) 出題内容はおおむね学習指導要領の目的・内容に適合している。

「倫政」については、導入3年目の科目で歴史も浅く、「倫理」と「政治・経済」の2科目から出題という点や、平均点調整など出題について多くの困難があると考えられる。しかし、受験者は増加する傾向にあり、本科目への興味関心も高まると予想されることから、今後とも工夫と努力をお願いしたい。

4 試験問題の表現・形式について

今年度の設問数は昨年同様、大問数6、設問数39であり、2点と3点を組み合わせた配点となっている。大問は第1問から第3問までが「倫理」分野、第4問から第6問までが「政治・経済」分野からの出題であった。設問数および解答数は「倫理」分野が19問、「政治・経済」分野が20問とほぼ同数であり、配点は各分野とも50点ずつであった。

「倫理」分野は、「倫理」の「青年期・現代社会」と「日本の思想」と「西洋近現代思想」のリード文と設問の一部が転用されたが、第3問の問1は「倫理、政治・経済」のみのオリジナル問題であった。後ろに示した資料の通り、用語や人名等についての知識を問うものがやや増加し、総合的な思考力、判断力、応用力を問うものが減少したのは、ややもの足りない印象を与えたのではないだろうか。また、各設問の表現については、受験者が十分に理解できる適切なものであった。

「政治・経済」分野では、政治や経済の諸課題について受験者に思考と理解を促す出題者のメッセージと意図が随所に感じられる。図やグラフを用いた設問は、データを加工した上でグラフ化するなどの工夫がみられ、受験者にも知識を活用して図を読み解く思考力や判断力等の総合力が求められる良問であった（第4問の問3・問5、第5問の問6）。ただ、リード文で示された事例に検討の余地が必要な設問があった（第6問）ので、リード文の重要性に鑑みて、十分な検討をお願いし一層の質の向上を求めるものである。

なお、配点については、「政治・経済」分野の全20問中「政治・経済」の追・再試験と異なる配点の設問が5問あった。同一の設問で配点が異なることは好ましいことではないため、今後はこのような傾向が極端に拡大しないよう努力していただければと考える。

5 要 約（総括的な評価）

リード文及び全ての設問について逐一検討してきた。個々の設問に対する評価は前述のとおりで

ある。以下、各分野について総括的な評価を述べる。

(1) 「倫理」分野

各リード文及び資料文は、全体的に例年通り倫理的示唆に富む意義深い内容となっており、「倫理」を学んできた受験者を大いに啓発するものであった。リード文においては、昨年同様、第1問において会話文が採用された。本年度は親子2人の会話であり、P (parent) とC (child) が分かりやすく示されており、受験者を惑わせることはなかったと思われる。会話文をリード文として使う場合には、今回のような分かりやすい構成のものにしていただきたい。資料問題については、新教育課程をも見据えた先進的な引用文も見られた。特に、フーコーの『監獄の誕生』からの資料によって作られた問題は、教科書レベルを超えた内容ではあるものの、資料の読解とともに受験者の興味を高め、思索を深めることのできる良問であった。今後もこのような工夫の凝らされた作問を期待したい。

設問については、正誤の組合せ問題に加えて、多少詳細な知識を必要とする問題もあり、全体としてやや難しい難易度だった。しかし、フーコーの権力論やソシュールの記号論の知識など、現代思想の学習の充実も求められている点で、受験者の学習とともに授業担当者にも刺激を与える先進的な設問であったと思われる。今後も日常生活に関連し、受験者が主体的に人生や世界について考察することを促すような出題を意図していただきたい。また、本試験「倫理」にはないオリジナルな問題も付され、各分野にわたってバランスよく出題された。

学習指導要領との関連においては、各分野からおおむねバランスよく出題されており適切であったと言えよう。

(2) 「政治・経済」分野

学習指導要領で、高等学校教育に求められている内容に沿って、広い範囲から出題されている。全体として、教科書での学習を基本とした出題となっているが、応用力を問う問題もあった。しかし、「政治・経済」と比較すると、資料を分析して、思考力・判断力を問う問題が若干少ないようにも思われる。知識を問うことはもちろんのことだが、思考力・判断力を問う形の応用問題も更に充実させていくことを希望する。

リード文は、先行きが不透明な現代の状況を多角的に考え、未来を切り開いてほしいという出題者の強いメッセージなどが感じられる良文であると思う。今後も公民科が求める「良識ある公民」として必要な能力と態度を育成するためにも、これまで同様メッセージ性の強いリード文の作成をお願いしたい。政治や経済の基礎的概念や理論の理解を求める創意工夫された問題とともに、時事的な要素を含む問題や資料を用いて多面的・多角的な思考力・判断力を問う問題を今後とも期待したい。

※資料

「倫理」分野

主に基礎的・基本的な用語や人名等についての知識を問うもの	第1問 第2問	問1(2) 問3(2) 問4(2)	第3問	問1(2) 問3(2)	計 5問 10点
主に基礎的・基本的な概念等についての理解を問うもの	第1問 第2問	問2(3) 問3(3) 問4(3) 問1(3) 問2(2) 問5(3)	第3問	問6(3) 問2(2) 問4(3) 問5(3) 問6(3)	計 11問 31点
主に総合的な思考力、判断力、応用力を問うもの	第1問 第2問	問5(3) 問7(3)	第3問	問7(3)	計 3問 9点

「政治・経済」分野

注：() 内の数字は配点、また*印は基本的な問題と判断されたものである。

主に教科書に基づく知識により正解が得られる問題	第4問 第5問	問1(3)* 問2(2)* 問6(2)* 問1(2)* 問2(3)* 問3(3)* 問4(2)* 問5(2)* 問7(3)*	第6問	問1(2)* 問5(3)* 問6(3)* 問7(3)*	計 13問 33点
主として教科書に基づく知識を使って思考力や応用力により正解を導く問題	第4問 第6問	問4(2)* 問5(3)* 問2(3)*			計 3問 8点
主として時事的・社会的な知識から国内的・国際的な諸課題を考えさせる問題	第6問	問3(2) 問4(2)			計 2問 4点
資料やグラフ・図表などを使って理解力・分析力を問う問題	第4問 第5問	問3(2) 問6(3)*			計 2問 5点